◇◆第４回◇◆
「現代と親鸞」公開シンポジウム

宗教者にとって「現場」とは何か？

開催趣旨

親鸞仏教センター嘱託研究員　伊藤 真・中村 玲太

宗教が活きる場所、活動すべき場所とはどのようなところだろうか。世界を見渡せば、相次ぐ災害や戦争、感染症の蔓延、社会的格差の拡大など、さまざまな状況が多くの人々を苦境に陥れている。より卑近なところでは、長引くコロナの流行下、法会やミサなどで人々が時間・空間を共にし、教えに触れる機会が失われてきた。こうした状況は一方で、さまざまな立場で宗教に関わる人々にとって、孤独の中で聖典やその教えと改めて向き合い、考えることを迫ってきた面もあろう。

2023年３月16日に開催された第４回「現代と親鸞」公開シンポジウムでは、こうした状況下において、宗教者にとって「現場」とは何なのか、その多義性やあいまいさも含めて考えてみた。日々、死や苦しみ、人生の諸問題と直面せずにいられない宗教者にとって、そしてより広くは宗教にさまざまな形で関わるすべての人にとって、宗教がはたらき、活きる「現場」とは何か……３名の登壇者による提題と、全体討論と質疑を通じて、多角的に展開された議論の要点を紹介する。

◆ 問題提起と全体討論・質疑

Ⅰ　苦の臨床という「現場」

吉水　岳彦（大正大学仏教学部非常勤講師、浄土宗僧侶）

日本の出家僧侶にとって何が「現場」だろうか。「僧侶」を職業として考えれば、寺院を運営し、法要や葬送儀礼を執行し、法話をする場面などが「現場」なのかもしれない。しかし「出家僧侶」の生き方を選んだ者にとっての「現場」は、そうした場面に限られない。それらも大切ではあるが、今日、お布施の多寡（たか）を気にしたり、葬儀や法事以外では経典を読むこともない僧侶がいるのも事実である。仏陀ご自身が「人生は苦である」との認識の上でさとりへの道を歩まれ、数多くの絶望した者の受け皿となったように、生・老・病・死にまつわる一切の苦や煩悩に振りまわされている自己や他者と向き合うあらゆる場こそが、すなわち「苦の臨床」の場こそが僧侶にとっての「現場」といえよう。

こうした観点から、発表では３つの現場の重要性を指摘した。第一に、生活困窮者の支援や被災地などでのグリーフケアといった活動。他者の苦悩に向き合うことで無力な自己を教えられる、大切な場である。次に、念仏会や法要などの現場。苦しみを抱える自己や他者の苦を仏さまに無条件に受け止めていただき、仏・法・僧と出会い、向き合う場だ。最後に、教化・伝道・執筆など、仏法を探究・発信・共有していく現場がある。苦の臨床に立つことで、自己のあり方を問われ、葛藤し、苦悩するうちに学びとった知見を人々と分かち合い、自身が心から求めるさとりや救いの道を「共に歩もう」と声をかけていく場である。苦に満ちた世界を生きるすべての人々と、支え合い、済（すく）い合おうと励むさまざまな「現場」を通し、僧侶はいかにあるべきかを問いかけた。

Ⅱ 現場ではたらき、現場にはたらく —仏教の言葉を学ぶということ—

田村　晃徳（親鸞仏教センター嘱託研究員、浄土真宗大谷派僧侶）

「現場」という言葉には、「人が体を動かし、仕事を支えている場所」というニュアンスがある。私は住職であり、法事を執り行っているとき、そこは住職の現場と言える。だが、読書はどうか。また私は保育園の園長でもあり、保育の現場と言えば、クラスで子どもたちと生活している保育士のことを思う。しかし、読書をするのは住職にとって欠かせない時間であるし、職員室での書類作業も保育園を支えている。

僧侶である私にとって、さまざまな現場は、現代の諸問題に直（じか）に触れられるという点で大切だ。保育園では少子化や家族のあり方の急激な変化、虐待といった問題に直面し、寺では檀家さん・ご門徒から地域の人口減少や後継者不足といった悩みを聞く。私にとってはいずれも人間を学ぶ場だ。そしてそうした現場を通じて人間を学ぶ方法が仏教ということになる。その学びには経典の読解も含まれ、教えの言葉を知ることで、同じ現場でも自分の見方が以前とは変わってくる。それは「現場の再構成」とも言えよう。一方、現場での経験がテキストの読みを深めていくこともあり、現場と聖典は相互に循環する。

明治期の仏教者・清沢満之が述べたように、自分の生まれる境遇を選べない「落在」した者であるわれわれは、人としてどのように生きていくのか。清沢は苦悶の中で現実を見つめ、浄土真宗の教えに出逢い、信念を得た。そんな先人の人生に、私はいつも学んでいる。現場は環境と人間の相互作用でできている。人生は思い通りになるはずがないが、仏教の言葉がはたらく現場において、自分が背負っているものに一生懸命取り組むことで、人間は徐々に育っていくのだろう。

Ⅲ キリスト教から考える「現場」の歴史と未来

小原　克博（同志社大学神学部教授、プロテスタント牧師）

ユヴァル・ノア・ハラリは『サピエンス全史』の中で、人類には「虚構」を語る能力があるとし、そこから神々や神話などが現れたと指摘した。宗教の世界には、直接的には認知したり語ったりできないものをシンボリズムで再構築する力がある。キリスト教に即して言えば、「隣人愛」の実践を説く「善いサマリア人」のたとえ話が好例だが、新約聖書におけるイエスのメタファーは日常を異化し、現場の批判的な再構築を求める。聖書に限らず宗教のテキストは、われわれが陥りがちな認知バイアスを超えていく根源的な力を持っている。

発表では、キリスト教における聖書解釈（テキスト）と現場（コンテキスト）の関係を考える手がかりとして、20世紀後半以降、いわゆる解放の諸神学という新しい流れが生まれてきたことに着目した。ラテンアメリカ解放の神学、アメリカの黒人神学やフェミニスト神学、また日本で聖書と部落差別の現実とを重ね合わせた栗林輝夫氏の例などでは、貧困や抑圧に苦しめられていた人々が、その貧困や抑圧の現場で聖書を読み、個々人の心の中の罪だけではなく、社会の構造自体の中に罪の状態を見いだした。テキストを「現場」のコンテキストの中で読むことで、「現場」の新たな解釈を生み、共同体に新たな力を注ぎ込んだのだ。一方、「文脈化の神学」は、テキストがコンテキストから超越する力を持ち、現場を外部から批判的に見る視点を与えてくれることを示した。

最後に、SNSなどの情報空間で長時間過ごす若い世代にとっては、その空間こそが「現場」に他ならないことを指摘した。「現場」のバーチャル化が進展する中で、宗教はどのように対応できるのか、未来の「現場」も考えていきたい。

全体討論と質疑

全体討論でも多様な議論が展開されたが、常に変化する各種現場の中で、恣意的な解釈がなされる可能性や、両極に割れる解釈がもたらす分断・対立をどうとらえるかなどが問われた。それに対し登壇者からは、現場で向き合う相手から学ぶことも多いということや、宗教者として教えを語る際に、「御同朋、御同行」という意識をもって大切な言葉を聴き手と共有することを心がけていることなどが語られた。また、幅広い「解釈の共同体」の中に自分の解釈を位置づけていくことが重要だとの指摘もあった。さらに、現場の解釈が対立したとき、宗教者は仲介者として和解に導く役割を担い得るのではないかとの展望も示された。